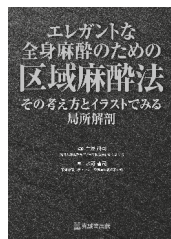




書 評

エレガントな全身麻酔のための 区域麻酔法 その考え方とイラストでみる局所解剖

監修・重見研司，著・水野省司



水野省司先生は京都府立医科大学の同級生で、府立医大麻酔科にともに入局した友人である。卒業後1年目に研修医として同じ職場で過ごしたが、水野先生は本当にいい奴で、先輩麻酔科医からとりわけ可愛がられていたことを今でもよく覚えている。当時、私も彼も麻酔管理を成立させることに必死で、エレガントな全身麻酔など夢のまた夢であった。そんな水野先生が教科書を書いたと聞き、しかもその題名が『エレガントな全身麻酔のための区域麻酔法』だと知った時には、思わず「水野おまえ気は確かか？」とつぶやいてしまった。ところが、読み終えた今「やるやんか水野、うらやましいぞ」と、正直思っている。

本書の狙いは明確である。区域麻酔を単なる付加的手技としてではなく、全身麻酔の中核に据えるために、いかに神経ブロックを成功させるか、そのために必要な考え方と手の動かし方を、著者の経験と理論で体系化して示している。とりわけ、小児を中心とした難症例の麻酔管理の中で磨かれた工夫が随所に散りばめられ、胸部手術に対する神経ブロックや小児硬膜外麻酔の章では、実際に水野先生が神経ブロックをしている場面が目に見え、浮かぶようであった。総論として「針の扱い方」やベベルテクニック、局所麻酔薬の濃度・種類の選択が最初に置かれている構成も、現場で使える教科書にしたいという水野先生の意思の表れだろう。

本書の大きな魅力は、140点を超える自作の局所解剖イラストである。ポップで親しみやすい一方、絶妙なデフォルメが効いており、解剖を真に理解していなければ描けない図ばかりだ。超音波

ガイド下神経ブロックが隆盛の昨今、画面に映る構造物を瞬時に把握するためには、解剖の立体理解が不可欠である。本書のイラストは、その理解を深めるのに優れている。

さらに重要なのは、本書に凝縮された経験知が、単なる経験則にとどまらない点である。「なぜそうなるのか」「なぜそれでうまくいくのか」という問いに対し、解剖学的根拠を背景とした解説が添えられ、知識が普遍化されている。本書は熟読し、理解してこそ真価を発揮する「教科書」であり、巷に多いマニュアル本とは一線を画している。蛇足ながら、同じく府立医大の同級生であり、麻酔科の同門として活躍している小尾口邦彦先生（京都府立医科大学集中治療部部長）もわかりやすい本を多数執筆されている。理論を重視し、それを多くの人に伝わる形にする執筆姿勢は、両者に共通する美点だと思う。その背景に、府立医大麻酔科で培われた経験が少しでもあるのなら、同門の一人として誇りに思いたい。

本書は、区域麻酔を「できるようになる」ための本であると同時に、全身麻酔を「エレガントにする」ための本である。明日からの臨床で確かな武器となり、同時に麻酔の考え方そのものを磨いてくれる一冊として、幅広い麻酔科医に薦めたい。

（京都府立医科大学大学院医学研究科
麻酔科学教室教授/天谷文昌）

B5判，156頁
2025年6月，5,400円＋税
克誠堂出版





書 評

小児の疼痛管理

監修・川人伸次，編集・高田 香



小児の痛みは、疾病、外傷、手術、医療処置などによる組織損傷、生物学的プロセス、心理的・社会文化的要因が原因で発生する。成長過程ごとに適切な痛みの管理が重要で、そのためには発達段階に応じた痛みの評価と治療に関する専門知識が必要である。小児の痛みは、言葉で表現しがたく、要因がさまざま、言葉よりも動作やしぐさ（膝を抱えるなど）で表現されることが多く、痛みの感じ方（閾値）が大人と異なるなどの特徴がある。成人同様に小児の痛みも、重症度が低く自然に治まるものから、緊急性の高いものまで、年齢や状態に合わせた評価と対応が必要とされる。

国際疼痛学会が Global Year Campaign として小児の痛みを取り上げ、その特徴と適切な管理方法の開発が急務であると述べてから、今年で 20 年が経つ。その後、世界保健機関が、2012 年に『病態に起因した小児の持続性の痛みの薬による治療』、2021 年に『子どもの慢性疼痛管理に関する新しいガイドライン』を公開するなど、世界的に小児の痛みへの対応が進みつつある。そのような機運の中、本書『小児の疼痛管理』が発刊された。まさに好機を得た発刊である。麻酔科医のみならず、小児の医療にかかわる多くの医療者に読んでいただきたい 1 冊である。

本書の特徴は、麻酔科医にとどまらずわが国における小児の痛み精通した各領域の専門家が、総論として小児の痛みの特徴および評価方法を、各論では急性、慢性、がん性と病態別に記載していることである。特筆すべきは、総論で新生児期から思春期まで各時期の痛みの特徴を経時的に記

載して、評価、診断、治療法にとどまらず、痛みの体験が及ぼす長期的な影響についてわかりやすく説明している点である。そして、各論においては、急性疼痛での精神面の配慮、慢性疼痛での発達障害と不登校、がん性疼痛での小児の緩和ケア、その他として検査・処置時や集中治療での鎮静・鎮痛に触れ、最後に看護師の視点も付け加えられていることである。

また、本書を手にとった際に注目してほしい点は、表紙と裏表紙のデザインである。表紙は、「pain」という単語を隠し文字として左側にちりばめて、注射器、錠剤、輸液パックを中央に置き、右側に「less」という単語が配置されている。治療を経て、「pain」が「painless」に変わるというイメージで描かれている。裏表紙は、「pain management」、「sedation」、「chronic pain」、「palliative care」を表紙と同じタッチでちりばめられ、本書の発刊に尽力した監修者の川人伸次先生、編集者の高田香先生の思いが込められていることを最後に強調したい。

ぜひ、本書を小児の日常診療の質を高め、痛みにも苦しむ子どもたちへ最適な医療を提供するための教科書としていただきたく、本書を推薦する。
(獨協医科大学医学部麻酔科学講座 山口 重樹)

A5 判，208 頁
2025 年 10 月，4,500 円＋税
克誠堂出版

